

酒ともやしと
横になる私

Sample

スズキナオ

悪魔のしわざ／距離と一円／一年中が「鍋の季節」／千円カットで時間を巻き戻す／仕事ください／宇宙空間とカレー麺／メール誤送信／カメラと肉眼／駅のエスカレーター／無法地帯／野菜って何？／死んだほうが早いのか／本当のオシャレは服なんか気にしない／私のカッコいい瞬間／味のない町／おでん列車の監禁地獄／キップをなくしたら／眠っている間にデータを吸い出される／ラジオが上手に聞けなくて／インチキ新書の宴／ボウリングが上手にできない／誰でもいつか受容する／私のスペシャルサンクス／ファックス！／比喩ってなんかうさんくさい／棒を見ても泣ける／高原君どこに行っただい

くるりのカード／つまらないッおはなし／爆弾と屋上製麺会／視線が私を弱くする／風邪をひいていた／いつまでもそばにいて／もつとがんばれ！俺／どうしたらいいの背もたれ／『まず味』よ、ありがとう／岡嶋君の小手／ここで寝なさい／どんな遅いレジも自分よりマシ／おじさんって誰？／私のヘルシー石／大昔の人の夢／マグボトルこそ、わが人生／コカ・コーラをぶつ放せ！／いつかの屋上メモ／絶体絶命のピンチと口内炎／見つからないほうがいい箱

糸のような水を見る／あきらめボックス／さつきまで攻撃してきた味方／鈴木宗江が好きだった／意味のない線／豆腐ぐらい大きな歯／絶対かけないレコードも持っていく／いつか絶対やる／頭の中のサミット／安心！ボロクラブ／ふわつと怖かった話／肘どうした／自分の動きはどこから来たのか／一個買ったらもうおしまい／風の歌を聴きました／眠気出ているばらう！／なにその能力！／除菌スプレーを除菌する／決闘！小型犬と私／突如ほとばしる情熱／ひと夏の体験

比喩とメールと消えた友達

悪魔のしわざ

普段、腹を立てることがほとんどない。

それは決して性格が温厚だからではなく、怒ってもどうにもならないことがほとんどだからだ。それに、誰かを怒って暴力をふるわれたら絶対にされるがまだし……。

なので、少し怒りそうになったら酒を飲むなどの方法で回避している。

丸めたタオルを全力で布団に向かってぶん投げるのもスッキリするし、誰も傷つかない

り、それ以上入っていかない。

で、犯人はそこで諦め、カップを穴にはめ込んだ状態で放置していく。

まず、缶専用のゴミ箱に缶以外のゴミを捨てていく時点で悪い。

だがそれよりも許せないのが、次の人が缶を捨てられないという点だ。

犯人は、自分の「捨てたい欲」を解消した上に、その後缶を捨てたい人の未来まで奪っていったわけである。

のでよくやる。ポスツという音しかないのもいい。

そんな私だが「これは許せない！」と思わずカッとなってしまうのが「路上の空き缶専用のゴミ箱にスタバかなんかの飲み終えたカップを入れて去るやつ」である。

それらのカップは、底部から上部に向かって直径が大きくなっていくフォルムで、缶を捨てるために作られたゴミ箱の穴に対し、下のほうは入るんだけど上部の直径は穴より大きい。ゴミ入れ用の穴をカップが塞ぐ形にな

また、そういったゴミ箱の周囲には、捨てるように思っ捨てられなかった人々の放置した缶が大量に増えていく。

それを見たゴミ箱管理者は「もうこんなところにゴミ箱置くのよそう……」と思い、ついにはゴミ箱が撤去されることになる。おそろしい負の連鎖。犯人、未来奪い過ぎ！

未来奪うやつ、嫌い！

というわけで、気が済んだので飲みに行ってきます。

大阪と東京を行き来する時、私はいつも深夜高速バスを使っている。

なぜなら、それが一番安いから。

大阪―東京間は深夜高速バスの本数もとても多く、各バス会社の競争が発生するため、価格帯が幅広い。とにかく安さが売りというバスもあれば、居心地のよさを重視した高級バスもある。私はその中でもできる限り低価格なものに乗るのだが、安さだけを追求していけば、平日なら片道平均3000円台で利

思えてきたのだ。私の中のバス代の基準が550円に引き下がってしまった。

3000円もあれば5回もキャンペーン価格で行き来できるのに！悔しい……。というような気持ち。要するに人間が今までよりさらにケチになった。

私はよく買い物に失敗するのだが、これは買う必要なかったな……と思った時、それが2000円のものだったら「まあ1回飲みに行ったと思えば」と心を落ち着ける。5000円のものだったら「2回ぐらい飲み

3000円台という価格ですら、あまり深夜高速バスに乗らない人には「えっ！そんな安いのか？」と驚かれるが、先日、『ウィラー』というバス会社のキャンペーンで、片道550円というバスに乗ることができた。1km≒1円というキャンペーンらしく、限られた席数が対象になっていたのを運よく予約することができたのである。

で、それはよかったのだが、困ったことに、いつも乗っていた3000円台のバスが高く

にいったと思えば」で、5000円のものなら「泥酔した勢いで深夜にキムチ牛丼でも食べたと思えば」と考える。

こういった心の中の物差しが、あのバスの価格破壊で脅かされている。

これからは買い物物のミス等で2000円を無駄遣いしたら「ほぼ4回は大阪―東京間のバスに乗れたぞー」と強く後悔することになる。

「なんでそんなに東京と大阪を行ったり来たりしたいの？」と問われれば返す言葉はまっ

1年中が「鍋の季節」

たくなのだが、550kmも離れた場所に行けるって、なんかすこくないですか？ 数字に迫力がある。

もう4月なので暖かい。

それに比べてライブハウスのあんな量のビールが500円！ パスタの量これだけで1500円？ 家賃の契約更新料!? これって一体なんのための金なわけ？

考えただけで失神しそうだ。ああ、こうして自分の器がどんどん小さくなっていく……。

暖かいといくらでも屋外で酒を飲むことができるので最高に嬉しいのだが、それはそれとして鍋ものが食べられなくなるのは嫌で仕方ない。

いや、「自分で勝手に食べればいいじゃん、鍋」と言われるだけなのはわかっているのだが、そういうことじゃなく、「鍋の季節」じゃなくなるのが嫌なのだ。居酒屋に入っても鍋

料理はメニューから消えている。みんな、何事もなかったかのように冷たいキュウリとかトマトにかぶりつくのであろう。

そもそも冬が鍋の季節なら夏はなんの季節なのか。「バーベキューの季節」だろうか。バーベキュー、めちゃくちゃ熱いけどいいのか？ 食材を、火でものすごく執拗に焼いてるのに！ 焦げるほどに！

しかし、冬だから温かいものが食べたい、夏だから冷たいものが食べたい、っていうような単純な思考で本当にみんな現代を生きているのだろうか。悪役レスラーみたいなコワモテのパティシエとか、さも仕事してまです

逆に冬だってみんなアイス食べるでしょうに！ 焼肉屋でシメの冷麺食べるでしょうに！

な表情をしつつ会社のパソコンに向かい、実はとんでもない下品なワードで検索してるやつ、などが溢れているのが本当の世の中。人の思いはもっと複雑なはずだ。

何が言いたいかというと、私は気候に関係なく年中ずっと鍋を食べ続けたいから「鍋の季節も終わりだね」なんて悲しいこと言わないで、ということです。よろしく頼むぜ！

千円カットで時間を巻き戻す

お金がないから髪を切るのはもっぱら千円カットだ。

チエーンだと『QBハウス』が最大手だろうか。最近、千円ではさすがにコストカットし過ぎなのか、どこも数百円値上がりしているみたいだが、そういった価格帯の店を総称するには今のところ「千円カット」という呼び名が一般的だと思う。

そういった店を利用したことがない方は想

間に自分がどんな髪型にしたいのか、何度も頭の中で言葉にしてみる。「横は耳が半分出るぐらい、後ろは襟足が跳ねない程度に短く、前髪は眉にかかるぐらいで！」といつでもすぐ言えるように。

それでも時に、そういった準備がまったく意味をなさなくなる瞬間がある。例えば店員にこう聞かれた時だ。

「何か月分、切ります?」

……自分が今〃何か月目ぐらいの状態〃な

像しづらいかもしれないが、細部までマニュアル化して極限まで効率化を進め、客1人にかかる時間を10分〜15分程度に抑えることでこの低コストを実現させている。そのため「なんとなくいい感じの髪型でお願いします」といったようなニュアンス重視のオーダーには対応してもらいにくく、おそらくそう注文したところで、黒いヘルメットをかぶったようなヘアスタイルにされることだろう。

もちろん行くほうもそれを承知して行く。ニュアンス的オーダーでお店の人を困らせぬよう、席に座って順番が来るのを待っている

のか、考えておくのを忘れた。まさか時間を単位にして髪を切るシステムがあるとは思ってもよらなかった。

「……1か月で」

と答えるしかない。それ以上、時間を巻き戻すのは怖いから。

爆弾と屋上製麺会

今朝、目が覚めたらテレビがつけばなしになっていた。

ジーパンで寝ていた。

昨夜、めちやくちやに泥酔して帰宅し、そのままベッドに倒れ込んだのだ。

テレビから「すべての爆弾の母と言われる爆弾が投下されました」という声が聞こえ、それを聞いて「ん？」と思いながらもまた眠り込んでしまったので、後になってあれは

夢の中の自分が勝手に作り上げた記憶だったんじゃないかと思った。「すべての爆弾の母」なんて、なんとも夢っぽいフレーズだし。

そしてようやくちゃんと目が覚めた後に「すべての爆弾の母」と検索してみたら、それは夢の中のフレーズじゃなく、「すべての爆弾の母」と呼ばれる爆弾をアメリカ軍がI S I Sの拠点を破壊するために2017年4月13日の夜に実際に使用したのだというニュースが出てきた。実戦で使用されるのは初めての爆弾で、核兵器以外の「通常兵器」と呼ばれるものの中では最大級の破壊力を持つものだという。

ここ数日は特にキナ臭いニュースばかりで、これを書いている今もアメリカと北朝鮮の緊張関係がピーンと張り詰めて、明日何か武力衝突が起るかも、みたいなニュースも出ているほどだ。

そうだったらどうなるのか、それがどんな大きな不幸につながっていくのか今はわからないけど、こんな時はすべてのことが間抜けに見える。

昨日、ライター仲間の玉置標本さんが主催する「製麺会」が高田馬場のビルの屋上で昼

間から開催された。玉置さんの持ち込んだ年代ものの製麺機で麺を作って食べる会である。天気もよくて気温も最高、こんな楽しいことあるだろうかと思つてワイワイやっていたのだが、ふと、でも何かがどうかなつたら爆弾が落ちてくるかもしれないんだよな、と思つた。

屋上で製麺機のハンドルをクルクル回して中華麺を作つてそれをズルズルするのんきな会。のんきの中でもかなり純度の高いのんきだと思ふのだが、そんなやつらの頭上にも爆弾が降ってくる可能性はある。

そしてそうならば少しも抵抗できずに我々の製麺会は破壊され尽すだろう。

空の下で麺を茹でること、それを「うまい！うまい！」と言って大人たちがはしゃいで食べることに、「おっ！向こうのビルの陰にまだ桜が見えるじゃないですか！花見だ花見！得した」と笑って発泡酒をグビグビ飲むこと、誰かが酒をこぼして誰かが慌ててそれを拭くこと、そんな全部が、爆弾の前にはあまりにくだらないことに思えてひきつったような笑いが込み上げる。

視線が私を弱くする

人に見られていると、なぜあんなにできないのだろうか。

昔勤めていた会社にまだ入社したてのある日、先輩が私のモニターを覗き込みながら作業を教えることになった。先輩が私の肩越しにモニターを見ながら、操作は私がする、という状況である。

先輩が「じゃあ、ここの文字列をこっちはほうにコピーしてください」というのを聞き

そしてそういう取るに足らないくだらないことを愛しくて仕方ない私は、爆弾の圧倒的なぐだらなくなさに悔しくて涙が出そうになるのであった。

ふざけんなよ爆弾！宇宙の外に消えてくれ！俺たちは空の下でおいしい麺が食いたいんだよ！ちくしょう！

ながら、コントロールC押して、そこで、コントロールV押して……あれ、何も出てこない。空振りである。慌ててもう一回やろうとすると今度は選択範囲がずれちゃって、みたいにワタワタしていたら、先輩が上司に向かって「ちよつとー!!鈴木さん、コピーができないんですけどおー!!」と叫んだ。

いや、できるのである。普段はできるのだが、見られていると緊張して「コピー」も「ペ」もできなくなってしまうのだ。

さらに昔にさかのばれば、小学生の頃、近

所の公園のうんていの頂上に登り、そこからスタツと飛び降りられることに気づいた。幾度となく繰り返して「これ、俺すごいんじゃない?」と思ったので、母親を呼び、それを見てもらうことにした。

すると成功率100%だったはずの飛び降りが緊張によつて失敗し、手の骨が折れた。

誰かに見られている緊張感で自分の実力がめちやくちや下がるのだ。だから本当の俺はすごいんだぜ、といつも思っている。

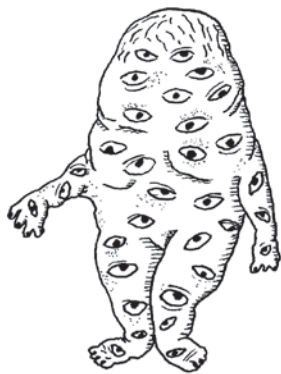
ただ、それを誰にも見せることはできない。

風邪をひいていた

現実とは違う。

現実をもとにして物語を作るとしたら、現実の特定の部分だけを誇張して切り取ったり貼り合わせたり、とにかく色々加工して作っていく。そのため、現実のダルい部分がカットされていることが多い。しかし自分にとってはそのダルい部分こそが重要で、時が経っていつまでも心に残っているのはそっちのほうだったりする。

私は現実には風邪が付きものだよな、と思う。



ずつと昔のことだが、当時思いを寄せていた女性とデートの約束をして、数日前からドキドキしていた。あの辺を散歩して、あの店に行つて食事をして、とか色々考え、思い直して微調整を繰り返したりした。「うまくいけば、一気に進展することもあり得る」そう思うと緊張する。

そして迎えたデート当日、女性はマスク姿で現れた。風邪をひいているのである。

いや、そうまでして来てくれて、なんだか申し訳なかったし、もちろんありがたくもあるのだが、隣で咳込んでいる女性をどんな小

話で笑わせることができるのか、わからない。
「熱はないけどようやく外に出られるようになったばかり」だという。

結局、女性は一軒目に入ったお店で小1時間ほど食事をして帰っていった。

前日まで、私は「相手がこう言ってきたらこうしよう」「そしたらこんな風に答えよう」と様々なパターンをうだうだと想像していたが、相手が風邪をひいている可能性については一切考えていなかった。

時に達也がめちゃくちゃ風邪をひいてるってことはないだろう。『美味しんぼ』で、いよいよ究極のメニューと至高のメニューが対決するという大事な日に海原雄山が風邪をひいていて味が全然わからないということも考えにくい。

ドラマでも映画でも、大事な場面で主人公が風邪をひいているのを見たことがない。

いや、たまに高熱が出て寝込むようなシーンもあるけど、たいてい派手に演出され過ぎている。もっと地味な「まあ無理すれば行けなくないけど、具合悪いな……」ぐらいの感

なんだらう。「負けた!」という感じ。

宮本武蔵と佐々木小次郎の巖流島の戦いで武蔵が風邪をひいてマスク姿でやって来たら小次郎は「え!」と思うだらう。最強の奇策である。

私は「現実」というものに負けたのかもしれない。

一方「物語」のほうを考えてみてほしい。
例えば『タツチ』だ。死んでしまった弟の和也のかわりに達也がマウンドに立つ、その

じこそ現実ならはだ。それこそが、物語が捨ててしまっている大事な要素なのだ。

「どうだ物語め! こっちには風邪があるからな!」と、妙な武器を振りかざして現実の肩を持ちたくなる気分だ。